

皆さんは「シャボン玉」という童謡を知っていますよね。

シャボン玉 飛んだ 屋根まで 飛んだ
屋根まで飛んで こわれて消えた
風、風、吹くな シャボン玉 飛ばそ

この歌を聴いてどんな情景を思い浮かべますか。小さな子どもたちがキャッキ言いながら無邪気にシャボン玉を飛ばして遊んでいるような情景でしょうか。私も最初はそのようなほのぼのとしたイメージを持っていました。しかし、この歌を作詞した野口雨情は、一説によると自分の娘を生後わずか一週間で亡くしているらしいのです。それを踏まえて改めてこの歌を聴くと、印象がだいぶ変わってきます。二番は次のように続きます。

シャボン玉 消えた 飛ばずに 消えた
産まれてすぐに こわれて消えた
風、風、吹くな シャボン玉 飛ばそ

シャボン玉遊びをしている子どもたちを眺めている野口雨情が、屋根まで飛ぶシャボン玉もあれば、産まれてすぐにこわれて消えるシャボン玉もあるのを見て、それを我が子に重ね合わせていると解釈できなくもない。もしこれが本当だとすれば、野口雨情は計り知れない喪失感を感じていたことが想像できます。

「〇〇ロス」という言葉を耳にすることがありますね。何か大切なもの、大好きだったもの、夢中だったもの、懸命に取り組んでいたものなどを失くした時の喪失感のことです。そして、そのような時は、寂しさや気分の落ち込み、力が入らない、元氣が出ないなどのうつ的な状態に陥ることもある。大事にしていたペットを失った後の「ペットロス」という言葉は聞いたことがあるかもしれませんが。雨情の場合は「娘ロス」の状態で「シャボン玉」を作詞したのかもしれないですね。

この感覚は、生命あるものだけに感じるものではないことを私は数年前経験しました。私は産まれてから大学を卒業するまでの22年間で東京で過ごしました。その時に住んだ家は、木造平屋の小さな借家でした。狭いながらも両親と男兄弟3人で協力して過ごしたいいい思い出は今でも消えません。兄弟それぞれが独立し、両親が郷里へ帰った後にも、この家には入居者がいたようで、東京方面に行く時には、私は時間を見つけて自分を育ててくれたこの家を見に行き、懐かしむのがとても好きでした。面識はなくてもこの家には入居者がいて、生活感がある様子にホッとする感覚があったのです。ところがある年、その思い出の我が家が突如として失くなってしまったのです。築年数も相当古く、修理費等を考えると、大家さんにとっては家賃収入を得るよりも、駐車場にするなど、別の土地利用を考えた方が合理的な判断であることは理解できます。その判断に異論を差し挟む余地は全くないのですが、完全な更地となり、草の生えだしたその土地を見つめながら、私は形容しがたい喪失感に苛まれたのです。「ここにはテレビがあった」「ここは台所」「ここはお風呂」「ここはトイレ」などと考えながら、その土地を踏みしめると、様々な思い出がよみがえり、涙もなく涙が溢れ出し、それを止めることができませんでした。あの我が家はもう、自分の記憶の中でしか存在しない。自分の目で実際に見ることはもう二度とできな

いと考えると、急にもの凄く遠い存在になってしまったような気がしたのです。見て懐かしむということができなくなり、それからしばらくの間、私は心の中にポツカリと大きな穴が開いてしまったような、空ろな気分が続きました。つまり「思い出の我が家ロス」状態に陥ったのかもしれませんが。

この「〇〇ロス」を経験している人が、現在日本にも世界にも少なからずいることを私たちは忘れてはいけません。東日本大震災や熊本・能登などでの地震で、最愛の家族や友人、家や店舗を失ったり、未だに帰宅できなかったりする人がたくさんいます。国外をみれば、ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエルの戦争で、命を落としているのは兵士だけでなく、民間人までも巻き込まれている。彼ら一人一人には必ず家族や近い関係の人たちがいて、まさにその人たちが「〇〇ロス」に苦しめられている訳です。ニュース映像で見る爆弾を落とされた町は思い出もろとも全てが瓦礫と化しています。悲しいことですが、この状況を解決できる人は今のところ世界に一人もいないのです。

それでは、与論に目を向けてみたとき、ここでは人命を失うほどの自然災害はあまり起こらないし、日本も今のところ戦争はしていないので、「〇〇ロス」を経験するようなことはないと安心できるでしょうか。

皆さんは与論町の人口ピラミッドを見たことがありますか。年代ごとの人口を棒グラフで表したものです。与論町の場合、男女とも20代が極端にくぼんでおり、最大のボリュームゾーンである60代から70代前半にかけて徐々に増えていく感じの、頭でっちなアンバランスなピラミッドです。結婚して子供をもうける若い世代が極端に少なく、自然の摂理としてこれから数十年の間に亡くなられる世代が最も多いこの島は、これから急激に人口が減少することが予測されます。令和3年に出生した与論町総合戦略の中で示された人口推計を見ると、今から約30年後の2055年、いくつかあるシミュレーションの中で最も人口が多い予測は約3900人ですが、最も少ない予測では約2700人です。この予測通りになった場合、現在の人口の約半数の島民で現在と同等の経済活動ができていいのか。学校自体も存続しているのか。想像力を働かせて、島の存続に対するマイナス要素を今から一つ一つ潰していかなければなりません。それを考えるのは今の大人だけでなく、30年後、40代後半となり、高校生くらいの子供がいてもおかしくない皆さんの世代なのです。なぜなら、この島に縁もゆかりもない人が救いの手を差し伸べてくれることなどあり得ないことを考えると、与論島の未来は与論にルーツを持つ人が責任を持たねばならないのは当然のことだからです。だからこそ、先月の講演会では山下賢太さんをお呼びして「暮らしたくなるシマをつくる」というタイトルで講演をお願いしたのです。何もせず手をこまねいていると、さらに30年後の2085年には人口減少に歯止めがかからず、有人島として維持することすらできないことになっているかもしれません。その頃、70代後半になった皆さんが、与論島以外の場所で、人が住まなくなったこの島を思いながら、「ふるさとロス」「与論島ロス」の涙を流さないためにも、今からできることを身近なレベルから考える必要があるのです。自然災害や戦争がなくとも、大切なものは失われる可能性があることを忘れてはなりません。山下さんが言っていたように、人口減少は日本全体の課題でもあります。その課題にどこよりも早く先進事例として取り組みめるのが与論なのです。将来、皆さんの中からこの課題を解決するリーダーが生まれることを期待しています。